

| 区 分 | 持続性の高い農業生産方式の内容 | 施用の目安等 |
|---|---|---|
| 有機質資材 施用技術 | <p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p> <p>○緑肥作物利用技術 緑肥作物（ソルゴー等）を栽培し、作付け前にすき込む。</p> | 2 t/10 a |
| 化学肥料 低減技術 | <p>○局所施肥技術 局所施肥により肥効率を向上させる。</p> <p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p> | 化学合成窒素量 ・早生・早生中生(直播き・移植) 15.6kg/10a 以内 ・中生・晩生(直播き・移植) 16.8kg/10a 以内 |
| 化学農薬 低減技術 | <p>○機械除草技術 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：B T剤(コガ、ハスモンヨリ)など</p> <p>○対抗植物利用技術 土壌害虫密度を低下させる植物を栽培することにより害虫被害を軽減する。</p> <p>○熱利用土壌消毒技術 太陽熱などの利用により土壌病害虫を駆除する。</p> <p>○光利用技術 光反射資材利用により害虫を忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術(育苗期、生育初期) 被覆資材により有害動植物の付着を防止する。 ・防虫ネット(アブラムシ類・コガ)など</p> <p>○フェロモン剤利用技術 フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。 ・リトルア剤(ハスモンヨリ)など</p> <p>○マルチ栽培技術 紫外線反射マルチ、生分解性マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。</p> | 化学合成農薬成分回数 ・早生・早生中生(直播き・移植) 7成分以内 ・中生・晩生(直播き・移植) 5成分以内 |
| <p>その他の留意事項</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。また、土壌分析により施肥量を調節する。連作障害回避のため、水稻栽培も含めた輪作に努める。収穫後の残さを適切に処分する。</p> | | |